「キャンパス交流：より良い国際理解とは？」

国際交流学科２・３年　小代有希子ゼミナール
報告者：時田亮、楊欣、E. Jerick、加地弘明、岩淵隆志、山下昌志、青木麻衣
指導教員：小代有希子

はじめに

「キャンパス交流」という言葉を深く考えたことがあるだろうか？
私達の通うキャンパスには、中国や韓国、モンゴル、インドネシアなどからの留学生が在籍する。短期または大学院レベルではスペイン、アメリカ、フランスなどからの留学生もやってきて、私達と同じように学生生活を送っている。いわば「小さな国際社会」ともいうべきこのキャンパスで私達は留学生と有意義な交流ができているのだろうか？

私達小代ゼミナールは留学生を誘って地元主催の祭りのイベントに行ったり、毎年６月にキャンパスに滞在する米国ストーニーブルック大学生との交流会を行なったりして、相互理解を促進すべく交流を図ってきた。しかし参加した留学生の感想を聞くと、その交流の仕方に必ずしも満足しているとは言えないようだった。日本人学生と留学生が考える「交流」にズレがあるとすれば、今後どんなに交流を続けても、私たちの一方的な自己満足に終わってしまい、互いに歩み寄ることは不可能である。より良い「キャンパス国際交流」の在り方について考える必要があろう。

今回の報告では日本人側の交流感覚の諸問題や留学生の考えること、さらに交流をさえぎる壁という３つの点から分析し、改善策を考えていきたい。昨年度までのゼミ生と留学生との交流の詳細については、私達のホームページ『国際交流ダイアリー』を参照していただきたい。（ http://www.geocities.jp/koshirosroom/jp/diary.html ）

１．日本人の交流感覚

日本人が外国人との「交流」の最善手段として考えがちなのは、日本文化を紹介することである。私達小代ゼミナールもこれまではストーニーブルック大学の学生に日本の「子どもの遊び」を知ってもらうために様々な企画を用意した。一昨年は折り紙と「だるまさんが転んだ」を教え、昨年は「かるた遊び」を伝授し、さらに「三島サンバ」をゼミ生とアメリカ人学生全員でハッピを着て踊る機会も設けた。しかしアメリカ人学生の反応は今一つで、中には明らかに拒否反応を示している学生もいた。

また同年８月にゼミ生と留学生数名が伊豆の国市主催の薪能に招待された際、こちらは意気込んで行ったのだが、留学生の率直な感想は「内容が難しく訳がわからない」「ごめんなさ

い、つまらなかった」で、これには主催者も苦笑いだった。

国際交流を手がける日本人は「日本に来る外国人は日本の伝統文化が好きで、それを教えたりすれば喜んでくれる」という思い込みがあるようだ。それによって交流の「一方通行」を引き起こし、相互理解の促進に歯止めを掛けてしまっていないだろうか。

さらにもう一つ私たちの習慣として、つい「おもてなし」という構えた態度をとってしまうことが考えられる。先方が何を求めているか分からないにもかかわらず、日本的基準で考えてよかれと思うお膳立てをしてしまい、それをもって相手にくつろいでもらおうと（期待）する。　これでは相手側の熱意を奪ってしまう事にもなりかねない。

こうした過去の反省を踏まえて、今年のゼミ主催のストーニーブルック大学生との交流会は「日本文化を紹介」して「おもてなし」をするという従来の型をやめて、討論会のみを行うことにした。　昨年行なった多少準備不足の討論会が「もっと日本人学生と真剣な会話をしたい」と希望する彼らに非常に評判が良かったという手ごたえがあったからだ。

今回の討論会では、日米両方の学生にとって親しみやすい２つのトピック「ファッション」と「就職」を選び、あらかじめ相手に伝え、さらに関連資料作成、データの仕込みなどの準備をしていたので、進行がスムーズに進み、共通の土台に立って互いに腹を割って話し合え、共通点を互いに見出し、驚き、共感し笑いあい、それぞれ抱いていたステレオタイプが崩れ、良い雰囲気を作り出すことができた。（キャンパス・オフィシャルブログを参照 http://www.ir.nihon-u.ac.jp/sakurasaku/2009/06/19/　）

こちらの言い分・表現のみを受け取ってほしいと望むだけでなく、同時に相手のことを知る機会も設けてはじめて、双方向にベクトルが向き合った真の「交流」ができるようだ。

２．留学生の考え

留学生の考える日本のイメージとは、いわゆるステレオタイプの「日本の伝統文化」とかけ離れたものは言い切れない。事実ストーニーブルック大学学生との討論会でも、「今の日本には武士道精神がない」「マクドナルドなど、アメリカ文化が多すぎて良くない」という様な意見が出て、日本人側が違和感を感じたこともある。

４年間このキャンパスで大学生活を送る留学生の中にも「日本人とは、こういう人びと」という固定観念を持つ人もいる。下宿とバイトを行き来するだけで、日本人宅に滞在したりする経験のない人もいるし、日本人の友人を作る機会に恵まれない人もいて、彼らはますます真の日本を知る機会を持てない。

彼らとの交流はどのように改善したらよいだろうか。　逆説的だが、まず日本人学生と留学生の意見交換の場をより多く設けて、なるべく多くのコミュニケーションを図らなければならない。彼らの日本観に耳を傾けるべきであるが、同時に日本人が考える「日本人像」「日本観」も彼らにぶつけるべきであろう。

一方留学生もまた、彼らの出身国に対する「先入観」で彼らのことを判断されてしまうことを非常に残念がっている。中国からの留学生は、「日本人の友達に、中国はみんな自転車に乗って出勤しているのでしょう？と聞かれたが、それは３～４０年前の中国の話」と言う。彼女は　北京オリンピックの際、「中国ってそんなに発展しているんだ」と日本人が驚いたことが逆にショックだったと残念がる。韓国の留学生も日本人の友人が「ご両親は反日でしょう」と決めつけてきた、と嘆く。アメリカ人留学生は「アフガニスタンやイラクでアメリカ軍が戦っていることを聞かれるのがつらい」と言った。スペインからの留学生は「日本人は僕に闘牛とフラメンコのことしか聞かない」と苦笑いした。このような、ステレオタイプに頼る危ういコミュニケーションの経験は、日本から海外へ留学した学生にもあるはずだ。

「日本とはどういう国なのか？」という質問を日本人にすれば、十人十色の答えが返ってくるのが当然である。しかしその十人十色の答えを留学生達が聞かなければ、彼らの日本に対するイメージは固定されたままである。「日本らしさ」「今の日本の現状」を彼らに知ってもらうために、より多くの日本人学生が　彼らと話すより多くの機会を作り、臆せず何でも話していく必要がある。

３．交流をさえぎる壁

相互に実りある交流をするために、越えなければいけないいくつかの壁が存在している。

まず上で述べた「意見交換の機会提供」だが、日本人学生には、とにかく自分の意見をはっきり言う事をためらう傾向があり、出してよいトピックと出してはいけないトピックに関して自分でブレーキをかける傾向がある。

いくつか例をあげる。今年５月にゼミ生有志と中国人留学生とで修善寺に行った際、ゼミ生の１人は「彼らは日中間の暗い過去について、どう考えて何を感じているのか」と質問しようとしたが、楽しい雰囲気を壊すのはいけないと思い、結局質問しなかった。後にこの件をゼミ在籍の中国留学生に聞くと、「聞いてはいけないかどうかは、まず聞いてみなければ分からない」とアドバイスされた。日本人学生は妙な気遣いなどせずに、もっと積極的に意見を言ってもいいということか。

逆の例もある。今年６月、ゼミが協賛メンバーになっている『伊豆の国市国際交流協会』主催の講演会で、ゼミに在籍するフィリピン人学生が自国の文化伝統を紹介する機会をもらっ

た。ゼミ生とともに作成したパワーポイントやバンブーダンスを披露し、母国について楽しく知ってもらう場を作った。しかし歴史の話しになって、多大な犠牲を出した太平洋戦争について話しだすと、年配者が多い会場が静まり返ったため、彼は日本占領によるフィリピン人の死者数を言うのをやめた。ゼミ生たちにとっても、これは大きなジレンマだった。
（キャンパスブログを参照　http://www.ir.nihon-u.ac.jp/sakurasaku/2009/06/16/　）
過去の出来事や歴史問題に付きまとうこうした問題を、私達は避けたり見てみぬふりをしたりするのでなく、慎重かつ確固たる姿勢で対処していく事が必要である。

次に語学力の問題が挙げられる。キャンパスの留学生には「日本語がうまく喋れないので、思っている事が伝わらない。そのまま毎日を過ごしたら、周りの人に本当の自分とは違う自分像が出来てしまうのではないか、ものすごく不安だ」と嘆いている人もいる。キャンパスでは、同じ出身国同士の留学生が固まって歩いているのをよく見かけるが、日本語力に不安があるので、日本人の輪に入ることをためらうのだろうか。

しかし日本人学生の側は、彼らの語学力を過小評価している人たちが多すぎる。「留学生は日本語を全く話せない」と考える日本人も少なくない。「なぜ留学生に話しかけないのか」という問いに、「私は中国語が話せないから」とか「韓国語を知らないので」と答える日本人学生も多い。日本の大学に正規留学するためにはかなり高水準の日本語能力に達していることが条件だ。留学生は、基本的語学力のことでなく、高度なニュアンスの面を心配している、という理解と心配りが必要だ。

私たち日本人側の語学力を考えたら、私たちも反省することしかできないのが現状だ。彼らの母国語で積極的に彼らに話しかける努力や、彼らから学ぶ努力を見せてこそ真の相互理解である。そのとき「誤解されるのでは？」「理解されないのでは？」と心配する気持ちはお互い様だと考えたい。

４．　まとめ－大学への提言

以上の点を踏まえると、望ましいキャンパス国際交流とは「日本人学生と留学生が双方向で歩みより、コミュニケーションを深めて互いに受け止めあって進んでいく」ことである。日本人側は留学生の様々な問題を考慮して、彼らが受け入れやすい環境を作らなければいけないし、留学生側も同じ出身国同士で固まらずに　積極的に日本人の輪に入っていかなければ、何の交流も始まらない。問題なのは、日本人学生と留学生の間に明らかな線引きがあって、同じキャンパスの中で互いに避け合っていることである。この問題を解決するには、私達日本人学生と留学生の積極的な行動と、それに対する大学側の協力が必要と言える。

まず日本人学生が起こすべき行動の第一歩として、身近にいる留学生の友達に相手の出身の

国の言葉で挨拶をすることを勧める。相手の国の言葉で挨拶をするのは、人によっては「ふざけている、相手の国を馬鹿にしている」と思うかもしれない。しかし留学生は「自国の言葉を尊重してくれるのはうれしい」と考えるようだ。　留学生は、日本人が自分の国のことに興味をもってくれないことも寂しく、物足りなく考えているからだ。

以下に「キャンパス交流」促進のために小代ゼミが大学に依頼したいことを提言する。

まず現在４号館１階就職課の隣にある『国際交流ホール』の環境と使い方の改善を図ることだ。この部屋はキャンパス留学生達が談話をしたり、休憩したりするレクリエーション・ルームとして利用されており、もちろん日本人学生も自由に出入りできる。このような空間を共有し、一緒に利用することで会話の機会を増やせる。その為にはこの「国際交流ホール」を、より多くの学生が利用しやすいような１５号館内や８号館の食堂の近くなどに移動する必要がある。

またキャンパス国際交流を促進する学生主導の企画を、大学側が積極的に支援するようにしたらどうか。「日〇関係を考えるシンポジウム」などの講演会を設けて、その国出身の留学生に、学生目線の問題意識を持って、同じ学生を相手に話してもうことが考えられる。

関連して提案したいのが「留学生ウィーク」を設けることである。日本人学生が自らの活動を発表する場として「萌芽祭」「富桜祭」というイベントがあるなら、留学生が主導となって、自らの文化や活動を発表する「留学生ウィーク」なる機会が存在してもいいのではないか。自国の映画上映や、人気俳優、歌手、パフォーマーなどのビデオ紹介、絵画や芸術など自由に発表してもらうことだ。　留学生は日本人学生に対して自国文化の紹介が出来るし、日本人学生も彼らとの触れ合う良いチャンスができる。

実りあるキャンパス国際交流とは、「日本人と留学生双方がお互いの文化や習慣や考え方について分け隔てなく、腹を割って話すこと」である。大学キャンパスとは、まさにそうした場を育んでいく場所であるべきだ。私達小代ゼミナールはこれからも日本人学生と留学生の国際交流のあり方について考え、具体的に取り組んでいきたいと考えている。　（キャンパス・ブログを参照：　http://www.ir.nihon-u.ac.jp/sakurasaku/2009/06/25/　）

最後に、ゼミ３期生有志が 2009 年７月に、日本大学三島高校のために作成した「キャンパス国際交流促進ポスター」を紹介する。　どうかここに挙げた問題点を一緒に考えていっていただきたい。